

杉図像の含意について (1)

— 石山寺蔵「源氏物語画帖」四百画面を例に —

古 田 雅 憲

The Symbolism of the Cedar Iconography (1)

Masanori Furuta

【はじめに】

さまざまな「源氏絵」を見るにつけても、その場面の主人公たちの立ち居振る舞いとはまた別に、彼らに与えられた衣装の紋様や周辺の調度品に施された装飾などに、思わず知らず引き込まれることがある。草木花卉の図像類もその一である。絵師たちがそれぞれの流儀の粋を尽くして描き込んだ木々や花々は、もちろん物語の上では「背景」であり「脇役」であるはずだが、それが時に「主役級」の不思議な存在感を帯びて見えることがある。

たとえば図版①である。それは、江戸中期、土佐派の筆になるかとも言われる*₁ 石山寺蔵「源氏物語画帖」四百画面の一葉 (91 図) である*₂。須磨巻の五場面目 (全十四場面中) で、画面に添えられた付箋に「同五 桐つほの御はかへ参り給ふてい也」と言う。

物語*₃ に、須磨隠棲を決意した源氏が暇乞いのために故桐壺院の墓陵に参じた折のこととして、「明日とての暮には、院の御墓拝みたてまつりたまふとて、北山へ参でたまふ… (中略, 論者) …御墓は、道の草しげくなりて、分け入りたまふほどいとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立木深く心すごし。帰り出でん方もなき心地して拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり」と言うような場面である。

これについて影印解説*₄ は「画面は、源氏が亡き父桐壺院の墓前にひざまづいて手を合わせているところ。亡父にすぎるかのように一心に手を合わせて

いる源氏の姿がまことにいたましい。二人の従者は惟光と右近の将監か。山陵は山深く大木が繁り滝が落ちて、靈気が漂うばかりである」と読み取る。

なるほど画面中央、石造の五輪卒塔婆に向かってひざまずき、頭を垂れて手を合わせる貴人が源氏だろう。憂いの深さは、その横顔からは知られずとも、所作のうちに自ずから感じ取ることができる。言うまでもなく彼がこの哀切な一場の主役である。



<図版① 参考資料 12 による>

が、その姿以上に見る者の眼を引きつけてやまないのは、卒塔婆背後の木立であり、また彼の上方、一段の高みに屹立する木立なのではないか。その木立——杉を中心に松や広葉樹*5とが重なる杉木立は、一心に祈る源氏に向き合い、また遠く彼方から彼を見つめるかのようなのである（樹種の認定については後に触れたい）。

むろんその杉木立の図像は、物語に「北山に参うでたまふ」などと言うのを承けて、山あいの地を描く上でいかにも似つかわしい「背景」として選ばれているのだろう。が、上述のように、一場の主役たる源氏とほとんど対等に向き合っているかのような存在感を思うにつけても、それがただ「山あいの景物」として描かれただけとはどうにも思われない。

たとえば霊木としての杉にまつわる民俗*6を知る人ならば、雲間から漏れ来る月影に浮かぶその杉木立の内に、今しも故桐壺院の魂魄が降り立つのを容易に感じ取ることだろう。

またそのような幻視の生じ易いことは、杉と滝との霊的な結びつき*7を知る人においては尚更だろうか。画面最上方、物語にはそれと述べられない滝の姿が、実際の遠近にとらわれることなく、あえて言えば「唐突に」描き添えら

れている。それがまた見る者の目を否が応でも引きつけるだろう。水も豊かに轟と流れ落ちるその滝の偉容は、屹立する杉木立に優るとも劣らない。その姿と絶え間ない水音の幻聴とが、杉木立の靈性をますます際立たせるに違いない。そうしてただならぬ靈性を帯びた杉木立は、故院の「ありし面影」そのままに、源氏をじっと見下ろしているかのようである。

杉の図像を象徴的に用いることで、〈絵師たち〉*8 は、彼岸此岸を超える邂逅の夢幻のような一瞬を描き出した——そのように思われて仕方ない。



実は「承応版源氏物語」*9 に近似の一場面がある（図版②）*10。従者二人を伴った源氏が石積みの立派な墓前にひざまずき、碑銘に向かって手を合わせて一心に祈っている。周囲には木立が鬱蒼と茂っている。全体およそ91図（須磨五）によく似るが、木立の樹影はまず松、楓、榊（と思しき広葉樹）で、杉（と思しき針葉樹）も見えはするが、91図のそれほど目立ちはしない。また滝の姿は（月影さえも）、画面上下に立ちこめた雲霞の彼方に隠れているのか、見えもしない。



<図版② 参考資料 42 による>

「四百画面」と「承応版」と、画面の主題は似ていても、その趣きはかなり異なる。そ

こに、91図のような「杉と滝の不思議」はまったく読みようがない。杉の図像を象徴的に用いる——それは全ての絵師に理解され好まれたことでもなかったのか、または単に読者の「深読み」に過ぎないのか。



物語に、源氏は「森の木立木深く心すごし」と感じ、そこに「ありし御面影さやかに見え」て「そぞろ寒きほど」だったと言う。この画面を目の当たりにする人が、ふと杉や滝の民俗を思い起こすことがあったなら——彼は、それらの図像の内外に思わず息の止まるほど圧倒的な靈気が充ち満ちているのを感じ

取り、源氏の抱いたような深い感慨を身を以て追体験したに違いない。杉や滝の図像を単なる景物の描写として見過ごさず「深読み」をする読者にこそ、それらの図像は、描かれた人の心象や一場の雰囲気可視化する「仕掛け」として立ち現れるだろう。源氏絵を読む愉しみとは、そのようなものでもあろうか。

とは言いながら、その愉しみが読者の「深読み」にのみ生ずることなのか、それとも<絵師たち>の凝らした「仕掛け」に発するものなのかという点については、もう少し考えを巡らしてみても良いことだろう。

【杉図像の特徴】

そもそもそれは「杉」なのか——よく見ると91図（須磨五）の木立には三種類の樹木図が描かれている。よく目立つ針葉樹(a)・その背後にのぞく針葉樹(b)という二種類の針葉樹と一種類の広葉樹である。

針葉樹と広葉樹の区別は描かれた葉姿の違いに一目瞭然だろう。

二種類の針葉樹もよく描き分けられている。小稿に「杉」と言うところの針葉樹(a)は、枝に対して全方向に展開する針状の葉姿、屈曲のほとんどない樹幹、斜め上に向かう枝振り、全体的に紡錘形をなす樹影、が特徴的である。その点、針葉樹(b)は、枝に対して水平～上方向に展開する針状の葉姿、屈曲を伴う樹幹、横に向かう枝振り、などの特徴を持つ。<絵師たち>が両者を意識的に描き分けていることは確かである*11。



針葉樹(a)の樹種の認定に関して、124図（関屋一、図版③）に注目したい。その画面に添えられた付箋には「せきや一 源くるまにてうつせみ上らくおふさかにて行あひ給ふ所也」と言う。

物語に、在地での任を終えて帰京する常陸介（空蟬の夫）が、山深い逢坂関で偶然に源氏の一行とすれ違った折のこととして、『「殿は粟田山越えたまひぬ」とて、御前の人々、道も避りあへず来こみぬれば、関山にみな下りゐて、ここかしこの杉の下に車どもかきおろし、木隠れにみかしまりて過ぐしたてまつる』と言う場面である（傍線、論者）。

画面は逢坂関の近くの奥山道を描いたものと思しくて、画面上方、霞の向こ

うには関の柵杭もそれと見えている。車から降りてそのあたりの地面に居長まる介の一行の傍らを、今しも源氏を乗せた車が通りすぎようとしている。その奥山道の「ここかしこ」に生い茂る木立のうちに、確かに91図(須磨五)と同様の針葉樹(a)の樹影が見えている。〈絵師たち〉の踏まえる物語が今日通例の本文であるとは限るまいが、上述の「ここかしこの杉」からすれば、その針葉樹(a)は「杉」である。



〈図版③ 参考資料12による、以下同じ。〉

念のため、物語の全体から「杉」の一語を含む文脈を抜き出してみた。結果、「賢木巻/源氏が御息所を野宮に訪れる場面」、「蓬生巻/源氏が末摘花邸を訪う場面」、この「関屋巻/帰京する常陸介らが逢坂関で源氏と行き会う場面」、「玉鬘巻/再会した右近と玉鬘とが歌を詠み交わす場面」、「手習巻/初瀬参詣を巡って、浮舟と妹尼とが語り合う場面」の五場面に「杉」の一語を見出した。それを承けて、およそそれに対応する画面(76図, 121図, 124図, 164図, 368図)を眺めてみた。すると、それらの画面すべてに、この針葉樹(a)の図像が描き添えられているのを見出すことができた。針葉樹(a)が〈絵師たち〉の描く「杉」であると見て間違いはないだろう*12。

ちなみに124図の影印解説も「画面は、常陸の介の一行が源氏の石山詣での行列を道を譲って迎えているところ。左上が常陸の介の一行で女たちも多い。右下が源氏の行列。杉の大木が生い繁った逢坂山の険しい山道の彼方に、関所の柵が見える」と読み取っている。

【杉図像の作例(1)——山あいや鄙を舞台とする場面】

杉の図像を求めて「四百画面」を通観したところ、如上の特徴を有した樹木の図像が65画面*13に見出された。さて、それらのうちにも91図の図像に「深

どる道の右側は谷へと落ちかかり、その谷向こうには山稜が迫る。その尾根に、杉の数本と楓とが一群の木立を成している。遠く霞の彼方には、松かと思しい幾群もの大樹の屹立するのが見え隠れしている。

同じような杉の図像が他にもある。

たとえば 307 図（橋姫四）。その画面に添えられた付箋には「同四 うちへかほるうまにて木しけきなかをわけ行給ふ所也」と言う。これについて影印解説は「画面は、薫が八の宮に会いに宇治を目指して馬で木幡山を越えていくところ。さまざまな木々が繁り滝が流れ落ちる険しい山路の景」と読み取る。薫のたどる険しい山路の左右に、松や楓や広葉樹などとともに、幾群もの杉木立が確かに描き添えられている。

また 361 図（浮舟五）。その画面に添えられた付箋には「同五 うちより匂馬にてかへり給ふ こわたの山こえの所也」と言う。これについて影印解説は「画面は、宇治からの帰途、匂宮が馬で木幡山を越えていくところ…山は幾重にも重なり、大木が茂って、昼なお暗い深山の景」と読み取る。匂宮のたどる険しい山路に迫る山稜のあちらこちらに、杉木立が確かに描き添えられている。

これら三画面（265, 307, 361 図）はいずれも、鞍上の貴人がそれぞれの恋心をいだきつつ山中道を急ぐという画題である。いずれの画面も物語のうちには「杉」の一語が見られないが、それでも<絵師たち>は、そこに杉の図像を選び描き添えた。すなわち、物語などに「杉」と言わずとも、山あいの地を舞台とする場面には杉の図像を描き添えて、一見して舞台の雰囲気やそれを分かるようにする——それが<絵師たち>の流儀だったと言って良さそうである。言い換えれば、杉の図像は、山あいの地の深閑とした風情を象徴的に表す効用を帯びていたということでもある*15。



また杉の図像は、鄙の地を舞台とする画面にも多く見出される。具体的には、小野を舞台として 11 画面（266, 267, 268, 388, 389, 390, 391, 394, 395, 396, 399 の各図）、宇治を舞台として 9 画面（309, 311, 315, 324, 325, 368, 369, 386, 387 の各図）、その他、横川（398 図）、須磨（96 図）、明石（107 図）、大堰（132, 143 の両図）、筑紫（159 図）などである*16。

たとえば266図(夕霧二, 図版⑤)である。その画面に添えられた付箋には「同二 小野にて夕きりいて、藏人尉に物いひつけ給ふ所也」と言う。物の怪に苦しんだ一条御息所(故柏木の母)が療養のために移った小野の山荘が舞台である。その地を、落葉宮(故柏木の妻)に恋心を募らせる夕霧が訪ねたのである。ちなみに、その往路の様を描いたのが265図で、その山道にも杉の図像が描かれていた。



<図版⑤>

これについて影印解説は「画面は、夕霧が左近の将監をそっと呼んで、今夜泊まることを伝えているところ。将監は露台に手をつけて何か子細ありげに思いつつ夕霧の言葉を承っている。垣根の外では夕霧の帰りを待つ供人たちが馬とともに控えている」と読み取る。

なるほど画面中央、対面している二人が源氏と将監だろう。小柴垣の外、小高い丘の陰には、主の帰りを待ちかねてむずかる駒の口縄を引き絞りつつ、供人たちが今や遅しと控えている。そして、画面手前のよく目立つ丘の上に、松や杉から成る立派な木立が大きく描き添えられている。

物語には、「日入りかたになりゆくに、空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗き心地するに、蛸鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子のうちなびきけるいろもかしょう見ゆ。前の前栽の花どもは、心にまかせて乱れあひたるに、水の音いと涼しげにて、山おろし心すごく、松の響き木深く聞こえわたされなどして、不断の経読む時かはりて、鐘うち鳴らすに、立つ声もみ代はるもひとつにあひて、いと尊く聞こゆ。所がらよろづのこと心細う見なさるるも、あはれにももの思ひつづけらる」などと言う。

その文脈から「日入りかた」、「空のけしきもあはれに」、「小暗き心地」、「心にまかせて乱れあひ」、「山おろし心すごく*17」、「松の響き木深く聞こえ」、「よ

ろづのこと心細う」,「あはれにもの思ひ」などの言葉たちを紡いでみるだけでも、この場面が人の手の入らぬ「深閑とした風情」の充ち満ちるものであったことは容易に察知できる。

<絵師たち>は、山あいの地の場面と同様に、鄙を舞台とする場面には杉の図像を描き添えて、一見して舞台の雰囲気とそれを分かるように巧んだと言って良さそうである。言い換えれば、杉の図像は、鄙の地の深閑とした風情を象徴的に表す効用を帯びていたということでもある。

杉の図像は、山あいの地や鄙の地の深閑とした風情を象徴する——小稿に言う「杉図像の含意」の一はこの点である。

【杉図像の作例(2)——鄙めいて洗練されない振る舞いを描く場面】

一方で、洛中またはその近隣の場面に描かれる杉の図像がある。それらのうち幾葉かは、その場の主人公が鄙めいて都人らしからず、いかにも洗練されない振る舞いをしたと描くものである。

たとえば344図(東屋一, 図版⑥)である。常陸介(浮舟の義父)の邸宅が描かれている。屏風を背に使者(浮舟を妻にと乞う左近少将の使い)と対面している常陸介は、黒々と髭を蓄えて見るだに無骨である。せっかく設えた屏風ではあるが、その真ん中に太刀や矢を立てかけて、また傍らの妻戸には弓も二張り立てかけて、なんとも無粋である。その庭先に目をやれば、小柴垣のもと、楓とともに立派な杉が目目に飛び込んでくる。

<絵師たち>は、東国の受領らしく弓矢取るほどの人の、鄙めいていかにも洗練されない振る舞いや雰囲気を描き表す場面に、「山あいや鄙の地」を描くの似つかわしい杉の図像を描き添えた。言い換えれば、



<図版⑥>

杉の図像は、鄙めいて洗練されない様子や雰囲気を象徴的に表す効用を帯びていたということでもある。

また 346 図（東屋三、図版⑦）である。浮舟の結婚を案じる中将君（浮舟の母）が、中君（浮舟の姉）の邸を訪れた折のことが描かれている。そこで中将君は、匂宮（中君の夫）と左近少将（一度は浮舟と婚約するもそれを裏切る）とを見比べて、匂宮・中君夫婦の光り輝くような気品に並ぶべくもない、左近少将の無骨・凡庸を軽侮するのである。

画面では、匂宮が、参内する自分を追って出た若宮を振り返りつつ歩を進めている。その足下に平伏して何やら言上しているらしいのが左近少将だろう。その背に添い重なるように杉の図像が、前栽の植栽として描き添えられている。御簾の中の女たちや簀子縁上の男たちも皆、匂宮と左近少将を見比べているようである。

<絵師たち>は、女たちから侮りを受けるその人の、なんとも洗練されない様子や雰囲気を描き表す場面に、やはり杉の図像を描き添えた。ちなみに匂宮の視線を想像してみると面白い。彼が見下ろす左近少将の姿は、そのまま杉の樹影に重なっている——読者にしてみれば、匂宮が「洗練されない様子」の少将を「見下している」ようにも見えるからである。

さらにまた 271 図（夕霧七、図版⑧）である。その画面に添えられた付箋には「同七 夕きりす、りおしすりさてふみをたつね給ふ所也 少あかりたるところを心みに引あげ給へはこれにさしはさみてと有」と言う。

その前段の物語には、小野に隠棲する一条御息所（落葉宮の母）からの文が夕霧の許に届いたと言う。落葉宮（故柏木の妻）との仲を認める旨の手紙だった。夕霧が読んでみると、不意に、雲居雁（夕霧の妻）がその文を奪い取った——多くの「源氏絵」が好んで描く名場面の一である。

271 図はその次の場面を描いたものである。奪われた文を探して、妻の居ぬ間に心当たりの箇所を家捜ししている夕霧が描かれている。影印解説は「画面は、夕霧が、雲居の雁が隠した御息所からの手紙を見つけたところ。天袋の中から取り出しているが、本文には『御座の奥の少し上りたる所を試みにひき上げ給へれば』とある」と読み取る。その画面右隅、居室脇の植栽として立派な

杉の図像が描かれている。

〈絵師たち〉は、小野からの文を探す夕霧の、日頃に似ずなんとも滑稽で洗練されない様子や雰囲気を描き表す場面に、小野のランドマークみたく多用される杉の図像を描き添えた。

このように杉の図像は、山あいの地や鄙の地をそれと示す効用に関連して、登場人物の鄙めいて洗練されない様子や雰囲気を象徴的に表す効用も帯びているようである——小稿に言う「杉図像の含意」の二はこの点である。

【杉図像の作例 (3) ——思うに任せぬ別れを惜しむ場面】

たとえば 107 図 (明石七, 図版⑨) である。そこで〈絵師たち〉は杉の図像によって、まず明石という鄙の地の深閑とした風情を象徴的に描き表しているようだが、それが帯びる「含意」はどうやらそれに留まらないように思われる。

そのことを考えるために、まず 96 図 (須磨十, 図版⑩) を取り上げて比べてみたい。

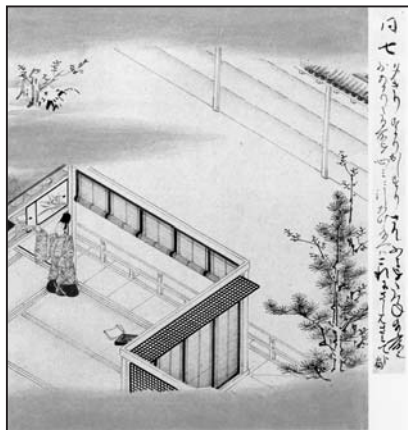
その画面に添えられた付箋には「同十 源すまにてる給ふ うしろの山にけふり立所也」と言う。これについて影印解説は「画面は、源氏が須磨の仮屋から背後の山に煙が立ち上るのを眺めているところ。険しい山あいから煙が立ち上っている」と読み取る。

なるほど画面中央、都を遠く離れた須磨の地であって、仮の住まいの背後に迫る「険しい山あい」を眺めやっっているのが源氏だろう。その眼差しの向かう先には二群の杉木立が描き添えられている。その図像が須磨の地の、人の手の入らぬ深閑とした風情を強く現すほどに、殷賑を極める都への深い憧憬もまたそこに確かに立ち上ってくるだろう。そうあればこそ、呆然とそれを眺める他ない源氏の失意と喪失感とが浮かび上がるというものである。

その 96 図に続いて杉の図像が描き添えられるのが 107 図である。その画面に添えられた付箋には「同七 明石ノ上へ源行く給ふ 入道さうのことを木丁ノかけより明石ノ上ノ前へやるてい也」と言う。須磨蟄居を許されて帰京する源氏が、明石君との別れを惜しんで明石入道宅で琴を爪弾くという場面である。これについて影印解説は「画面は、別れを惜しんでいる源氏と明石君の前に、



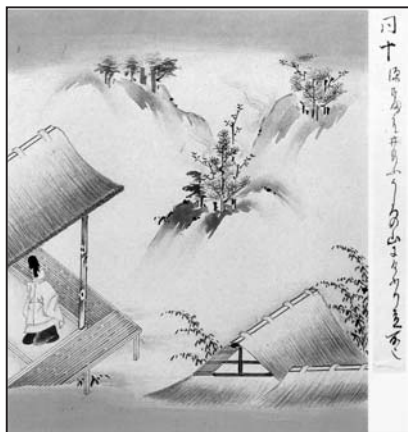
<図版⑦>



<図版⑧>



<図版⑨>



<図版⑩>

入道が几帳の陰からそっと箏の琴を差し入れたところ。悲しげな明石の上の表情がたましい」と読み取る。

なるほど画面中央、対面している男女が惜別の涙に暮れる源氏と明石君、そして女の背後にいる僧形者が明石入道ということだろう。読者の目はまず彼らの姿に引きつけられるだろうが、次の瞬間、視線は、源氏の背後、巻き上げられた簾の向こう側、そこに広がる前栽に佇む立派な杉木立に向かってゆくに違

庭は池も木立も大雪に覆われている」と読み取る。

なるほど画面奥，端正な竜胆図をあしらった屏風の前に居るのが源氏だろう。その眼前，導師と夕霧とが，杯を乗せた三方を間に挟んで対面して居る。御酒を捧げる家人（惟光か）は分相応に簀子縁上に控えている。読者の目はまず主人公たちに注がれるだろうが，次にそれは，前栽に屹立する木立に向かうだろう。画面右手前，屋外のほぼ全面を占めようか



<図版⑪>

というほど大きく描かれた木立である。師走の大雪を頂いたその木立は，大きく屈曲する立派な松やすっかり落葉した広葉樹とともに，これもまた立派な二株の杉から成っている。

物語に，この折の源氏は「御仏名も今年ばかりにこそは」と今を限りの出家を決心していると言う。だからこそ彼には「常よりもことに錫杖の声々などあはれに」思われて仕方なく，退出しようとする導師を引き留め，名残惜しさに一献賜ったと言うのである。この後，正月行事のあれこれについて言い置いて，源氏はずいに物語の舞台から退場してゆく——「雲隠」の直前場面であるとは周知の通りである。

「四百画面」でも源氏が描かれるのはこの画面が最後である。言わば，源氏と周囲の人との，そして同時に源氏と読者との終の別れの場面である。上述107図と同様に，<絵師たち>が，杉の図像によって，思うに任せぬ別れの悲哀を象徴的に表していると「深読み」するのはいかにも自然のことに思われる。



また400図（夢浮橋三，図版⑫）である。その画面に添えられた付箋には「同三 こきみおのよりかへりやうすかほるへ物かたりかほるふしんのでい也」と

言う。

これについて影印解説は「画面は、薫が小野から戻った小君の報告を聞いているところ。畏まって申し訳なさそうに報告しているのが小君。それを聞いている薫の表情は、失望よりも女の事情についてあれこれとを考えをめぐらしているようである」と読み取る。

なるほど画面左方、葡萄を描いた屏風前に居るのが薫、その御前に控える垂髪の童子が小君だろう。



<図版⑫>

画面を見るばかりでは読み取りにくい場面だが、物語に「いつしかと待ちおはするに、かくたどたどしくて帰り来たれば、すさまじく、なかなかかなりと思すことさまざまにて」などと言うのを踏まえれば想像もつく。すなわち、小野に匿われる浮舟の許へ、薫の使者として小君（浮舟の弟）が文を持参したのだった。が、浮舟は薫の文を強く拒絶し、返事をしないばかりか小君と会おうともしなかった。返事を「いつしかと待」っていた薫だが、否とも応ともはつきりしない小君の報告に、またあれやこれやと想像してみてはいよいよ恋心の闇路に踏み惑う——「源氏物語」の最終場面であるとは周知の通りである。

読者の目は、室内で向き合う二人にまずは注がれるだろうが、次にそれは、前栽に屹立する木立——画面右手前に描かれる楓と杉との立派な木立に向かうだろう。その杉木立は、もたらされない「小野からの文」に執心し、浮舟の真意を測りかねては俗な想像を重ねる薫の無粋な姿を象徴的に表していよう。

その趣向は上述 271 図（夕霧七）の場面にも似る。同図の夕霧は、妻に取り上げられ隠された「小野からの文」を探し求め、日頃に似ずなんとも滑稽で「洗練されない様子や雰囲気」を漂わせていた。400 図の薫の姿はまさしく夕霧そっくりである。その両画面ともに杉木立が描き添えられていることは、やはり杉の象徴性を用いた表現方法と言うべきであって、単なる偶然などではあ

るまい。

そのように見てくれば、物語の最終場面となる400図の杉木立は、上述288図（夢浮橋三）と同様に、物語の人々と読者との別れの象徴のように見ることもできるだろう。



この他にも、62図（紅葉賀七）では、年甲斐もなく言い寄ってはみたものの、源氏にあっさり袖にされる源典侍が描かれる。その姿はまさしく「思うに任せぬ別れの悲哀」に身もだえするようである。その前栽の植栽には杉二株の木立がそれと描き添えてある。

また154図（少女五）では、夕霧と雲居雁の逢瀬が描かれる。実は内大臣（雲居雁の父）は、この時、兩人を別れさせようと画策している。画面の幸せそうな男女には、はや「思うに任せぬ別れの悲哀」が忍び寄っている。その前栽の植栽には立派な杉と楓の木立がそれと描き添えてある。

また200図（真木柱一）では、髭黒大将のものとなってしまった玉鬘のものを、未練がましく訪れる源氏が描かれる。その人を見るにつけても、源氏は「思うに任せぬ別れの悲哀」を痛感するのだった。その前栽の植栽には杉の木立がそれと描き添えてある。

また296図（竹河三）では、玉鬘邸で催された酒宴のさなか、心から愉しめない薫は、せっかく勧められた酒盃も辞して、引き留めようとする藤侍従の手を振り解いて返ってしまう。何とない興ざめの風が漂う一室の庭前、杉の木立が佇んでいる。これもまた「別れの悲哀」の光景であると言えなくもない。

以上のように作例も少なからずあることから、〈絵師たち〉が、「別れ」の場面に杉の図像を描き添えて、それによって主人公たちの心のほど——「思うに任せぬ別れの悲哀」を象徴的に示唆することがあった、と見て良いように思われる。小稿に言う「杉図像の含意」の三はこの点である。

（以下、次稿に続く。そこでは「荒廢」、「神仏」、「靈性」などについて言及してみたい。）

〔注〕

- *1…この点については参考文献 2, 9, 11, 12 などに詳しい。
- *2…参考文献 12 による。以下、「四百画面」の図版引用はすべて同書による。
- *3…「四百画面」の絵師が一々の画面の描きようを構想するにあたっては、先行の実作や場面集などを参観しただろうが、それとともに「物語」それじたいの表現は当然のことと踏まえていただろう。ただし彼の踏まえた「物語」が今日通例の本文であるとは限らないし、また別に古注釈類が示した読み解きを踏まえている場合もあるだろう。今とりあえず小学館『新日本古典文学全集』の翻刻本文によって参照はするが、「とりあえず」以上のもではありえない。
- *4…参考文献 12 による。以下同。
- *5…描かれた葉姿から広葉樹だとは知られるが、樹種の指定は難しい。ちなみに 76 図（賢木一）では、簀子縁に上がった源氏が「小枝」を御息所に差し出している様子が描かれている。物語との対応から「榊の小枝」である。その描かれようは、杉木立の合間に描き添えられている広葉樹の梢ともよく似る。その広葉樹が絵師の描く「榊」であったとするならば、神聖な野々宮境内の風情を象徴的に表す景物と言って良いだろう。が、同様の広葉樹は 124 図（関屋一）など他の画面にも多用されていて、榊だと限定するのも難しそうだ。
- *6…この点については参考文献 1, 5, 6 などに詳しい。
- *7…この点については参考文献 4, 6, 7, 10 などに詳しい。
- *8…91 図に描かれる杉木立と滝の表現が「四百画面」の絵師その人自身の巧であったなどとは言い切れない。彼はただ、先行の実作等を参観したり場面集から引用したりしたにすぎなかったのかもしれないから。そこで「四百画面の絵師と、彼が参観引用したであろう実作や場面集等に携わった先達たち」を合わせて、小稿ではく絵師たち>とすることにする。また<絵師たち>の傍らに、物語や注釈に通じた注文主・制作者の在ったことは想像に難くない。
- *9…参考文献 42 による。
- *10…多くの場面を選び出していることで知られる女子大本「源氏物語絵詞」には、この場面の記述が見られない。参考文献 3 による。
- *11…「四百画面」を通観したところ (b) は「松」を描いたものと見るのが良さそうである。
- *12…たとえば 164 図（玉鬘六）。画面に添えられた付箋に「はつせにてそうぼうにおり見おろし給ふ 二本の杉たちをとと云歌の所也」と言う。再会を果たした右近と玉鬘が、長谷寺あたりの宿坊の高みから、参詣者の往来を眺めつつ歌を詠み交わす場面である。
- 物語には、「参り集ふ人のありさまども、見下さるる方なり。前より行く水をば、初瀬川といふなりけり。右近、『ふたもとの杉のたちどをたづねずはふる川のべに君をみましや うれしき瀬にも』と聞こゆ。『初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへながれぬ』とてうち泣きておはするさま、いとめやすし」と言う。

画面では、玉鬘一行が、切り立った崖の上に設えられた僧坊から、遙か下方の山道に行く参詣者の群を遠望している。その僧坊脇の山稜に、楓と共に針葉樹(a)が木立を成している。その樹影は、「ふたもとの杉のたちどを」と右近の歌に言うように、初瀬川の辺にあったという杉木立を描いたものと見て良いだろう。やはり針葉樹(a)が<絵師たち>の描く「杉」であるらしい。

- *13…具体的には以下の各葉である。7, 30, 32, 36, 37, 38, 60, 62, 71, 76, 81, 89, 90, 91, 96, 107, 112, 121, 124, 125, 132, 143, 154, 156, 159, 164, 182, 200, 234, 241, 264, 265, 266, 267, 268, 271, 285, 288, 296, 304, 306, 307, 309, 311, 315, 324, 325, 344, 346, 353, 361, 368, 369, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 394, 395, 396, 398, 399, 400。

ただし306図の針葉樹は襖障子に描かれた画中画である。ちなみに216図・224図の針葉樹は、その葉姿などは(a)に似るが、紡錘形の樹影を見せないことから、むしろ(b)松と見てここに含めなかった。

- *14…「山あい」と「鄙」とを厳密に区別することは難しいし、また厳密に区別する必要もないようだが、およそ前者を舞台とする画面には、36図(若紫二)、37図(若紫三)、38図(若紫四)、81図(賢木六)、91図(須磨五)、124図(関屋一)、164図(玉鬘六)、265図(夕霧一)、307図(橋姫四)、315図(椎本四)、361図(浮舟五)、398図(夢浮橋一)などがある。

また後者(鄙)を舞台とする画面には、96図(須磨十)、107図(明石七)、132図(松風三)、143図(薄雲七)、159図(玉鬘一)、266図(夕霧二)、267図(夕霧三)、268図(夕霧四)、309図(橋姫六)、311図(橋姫八)、324図(総角八)、325図(総角九)、368図(浮舟十二)、369図(浮舟十三)、386図(手習二)、387図(手習三)、388図(手習四)、389図(手習五)、390図(手習六)、391図(手習七)、394図(手習十)、395図(手習十一)、396図(手習十二)、399(夢浮橋二)などがある。

その他に156図(少女七)には、朱雀院南庭築山の植栽として杉の図像が描き添えられている。作庭の趣向として「山あい」を摸したものだらう。

- *15…ちなみに265図(夕霧一)の場面について、物語には、夕霧の辿る山道は「ことに深き道」ではなかったけれども、「小山の色なども…秋のけしきづきて」たいそう美しいものだったと言う。その様は、「都に二なくと尽くしたる家居」の造形の美しさに比べても、なお「あはれも興もまさりて見ゆる」ものだった。杉の図像は、単に山あいの深閑とした風情を象徴するばかりでなく、そのような場面全体に対する好ましさを——人の手を尽くした洛中意匠の美麗に勝るとも劣らぬ奥山道の情緒に対する好感を醸し出しているようにも思われる。
- *16…小野と宇治を舞台とする画面で杉の図像が多く用いられている。杉は小野・宇治の「ランドマーク」みたく思われて面白い。また「手習」巻で浮舟を指して「ふる河の杉」と言うが、その人の多く登場する舞台が宇治・小野である。その人の呼称と活躍の場面と、その繋がりからもまた面白い。
- *17…ちなみに「心すごし」の一語は、91図(須磨五)にも「御墓は、道の草しげくな

りて、分け入りたまふほどいとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立木深く心すごし」のように見出される。

[参考文献]

- 1) 有岡利幸 (2010) 『もの与人間の文化史 149 - II・杉II』 (法政大学出版局)
 - 2) 片桐弥生 (1992) 「石山寺蔵『白描源氏物語画帖』について—源氏絵場面集の一例として」 (風間書房『講座平安文学論究 8』)
 - 3) 片桐洋一・大阪女子大学物語研究会 (1983) 『源氏物語絵詞—翻刻と解説』 (大学堂書店)
 - 4) 鎌田東二 (1998) 「滝の精神史」 (“is” 79, ポーラ文化研究所)
 - 5) 川瀬敏郎・光田和伸 (2010) 『神の木 いける・たずねる』 (新潮社)
 - 6) 黒田日出男 (1986) 「熊野那智参詣曼荼羅を読む」 (『思想』 740)
 - 7) 小林康夫 (1998) 「幻の滝縁起」 (“is” 79, ポーラ文化研究所)
 - 8) 玉上拓弥 (1967) 「源氏物語絵詞について」 (『女子大國文』 19)
 - 9) 中野幸一 (2005) 「現存最多の四〇〇図 石山寺蔵『源氏物語画帖』」 (『日本古書通信』 70-8)
 - 10) 伴田良輔 (1998) 「滝の図像集」 (“is” 79, ポーラ文化研究所)
 - 11) 日向一雅 (2005) 「鷺尾遍隆監修・中野幸一編集『石山寺蔵四百画面源氏物語画帖』」 (『解釈と鑑賞』 70-10)
 - 12) 鷺尾遍隆監修・中野幸一編集 (2005) 『源氏物語画帖—石山寺蔵四百画面』 (勉誠出版)
- ※「源氏絵」の読み解きに関しては実に多くの研究成果が示されている。その主要なもの (2006年以前分) は参考文献 39 に掲げられているので参照されたい。
- 13) 秋山 虔, 田口榮一 (1999) 『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語 (新訂)』 (学習研究社)
 - 14) 秋山 虔, 稲本万里子監修 (2012) 『週刊 絵巻で楽しむ源氏物語五十四帖』 (週刊朝日百科 朝日新聞出版)
 - 15) 伊井春樹 (1989) 「土佐光則筆『源氏物語画帖』について」 (『詞林』 6)
 - 16) 伊井春樹 (2008) 『源氏絵物語』 (ソフトバンク・クリエイティブ)
 - 17) 伊井春樹 (2012) 『源氏物語—遊興の世界』 (思文閣出版)
 - 18) 石井正己 (2004) 『図説 源氏物語』 (河出書房新社)
 - 19) 出光美術館編 (2005) 『源氏絵 華やかなる王朝の世界』 (展覧会図録)
 - 20) 出光美術館編 (2013) 『源氏絵と伊勢絵』 (展覧会図録)
 - 21) 今西祐一郎編 (1997) 『土佐光吉画 後陽成天皇他書 京都国立博物館所蔵 源氏物語画帖』 (勉誠出版)
 - 22) 岩坪 健編著 (2009) 『錦絵で楽しむ源氏絵物語』 (和泉書院)

- 23) 神作光一, 中野幸一 (2005) 『絵解き「源氏物語」CD版<1-4>』(竹林舎)
- 24) 京都市立芸術大学芸術資料館 (2000) 『土佐派絵画資料目録九 画帖三』
- 25) 久下裕利 (1992) 「物語絵を読む—その五, 土佐派の源氏絵 (3)」(『学苑』629)
- 26) 久下裕利 (1992) 「絵入本『源氏物語』の挿絵図様について」(『学苑』634)
- 27) 芸術新潮編集部 (2008) 「源氏物語 天皇になれなかった皇子のものがたり」(『芸術新潮』2008年2月号, 新潮社)
- 28) 小島菜温子ほか (2008) 「源氏物語と江戸文化—可視化される雅俗」(森話社)
- 29) 小町谷照彦編著 (2007) 『絵とあらすじで読む源氏物語 溪齋英泉「源氏物語絵長大意抄」』(新典社)
- 30) 榊原 悟 (1989) 「住吉派『源氏絵』解題—附諸本詞書」(サントリー美術館事務局「サントリー美術館論集」3)
- 31) 清水婦久子 (2011) 『国宝『源氏物語絵巻』を読む』(和泉書院)
- 32) 新人物往来社 (2011) 『源氏物語絵巻』(新人物往来社)
- 33) 鈴木日出男監修 (2006) 『王朝の雅 源氏物語の世界』(『別冊太陽』140, 平凡社)
- 34) 高橋 亨, 久富木原玲 (2012) 『武家の文物と源氏物語絵—尾張徳川家伝来品を起点として』(翰林書房)
- 35) 田口榮一 (1988) 「源氏絵帖別場面一覧」(『豪華源氏絵の世界 源氏物語』, 学習研究社)
- 36) 田口榮一他 (2009) 『すぐわかる源氏物語の絵画』(東京美術)
- 37) 中野幸一編 (2007) 『九曜文庫蔵 源氏物語扇面画帖』(勉誠出版)
- 38) 日向一雅 (2007) 『謎解き 源氏物語』(ウェッジ)
- 39) 水野僚子 (2006) 「<描かれた源氏物語>のための文献ガイド」
(三田村雅子, 河添房江編『描かれた源氏物語』<翰林書房>に所載)
- 40) 三田村雅子, 河添房江 (2006) 『描かれた源氏物語』(翰林書房)
- 41) 三田村雅子 (2008) 『源氏物語 天皇になれなかった皇子のものがたり』(とんぼの本, 新潮社)
- 42) 吉田幸一 (1987) 『繪入本源氏物語考』(『日本書誌学大系』53, 青堂書店)
- 43) ランダムハウス講談社 (2008) 『世界の源氏物語』(講談社)